



なばり

2021年(令和3年) 1月10日発行

主な内容

1~4…新春特別企画「名張市民の夢」

5…市長・議長が選ぶ今年の一文字 6…税の申告 8…2月の相談

△ 催しへの参加は、マスク着用など感染防止にご協力ください(催しは中止・延期の場合あり)

発行/名張市秘書広報室 〒518-0492 名張市鴻之台1-1 ☎0595-63-7402 FAX 0595-64-2560 ✉pr@city.nabari.mie.jp



全日本大学駅伝で区間賞に輝く
川瀬 翔矢さん



思いもよらない世界へ

夢 や目標に向かって、後悔しないように努力を一つひとつ積み重ねていくことで、「思いもよらない世界」に到達できる気がします。駅伝でいうと、練習や大会ももちろん大事なのですが、食事や睡眠など毎日の日常生活の積み重ねが、すごく記録に影響します。「努力のための努力」になってしまっただけではダメ。勝つために、何をすべきか。その過程が努力にすり替わるだけあって、「自分は頑張っているな」と、満足してしまっただけでは、そこで終わってしまいます。スランプや怪我也も成長の糧にしながら、やるべきことをコツコツとやってきて、最後は、歯を食いしばって、気持ちで走り抜く。その成果が現れてきているのだと思います。

高 校生の時に、動画で見たインターハイの試合。いつか自分も同じ舞台に立って全国で競い合いたいという気持ちが強かった。自分が選んだ地元で、今、少しずつその夢を実現

できていることがすごくうれしいですね。実は、大学進学の際に関東の大学から声をかけられて、そこに行くという気持ちも少しはありました。でも、自分は地元をもっと盛り上げたい。僕が地元で頑張ることで、地方で頑張っている他の選手の励みになるのではと思ったのです。それに、素晴らしい監督のもと、夢に近づくために成長できる十分な環境があると判断し、地元の大学を選びました。

東 京オリンピックの選考に残ることが今最大の目標。次のパリオリンピックも視野に入れています。4月からは、地元を離れ県外の実業団チームへの加入が内定しています。しばらくは、大好きな名張を離れることになりませんが、生半可な気持ちではなく「一世一代の勝負」と思って頑張ります。名張は、なぜだか心がすっと落ち着くところ。いつかは戻ってきたいなと思っています。

Profile

つつじが丘出身。皇學館大学4年生。ハーフマラソンの現役日本人大学生1位の記録を持つ。昨年11月の「全日本大学駅伝対校選手権大会」では2区を走って過去最多の17人抜きを果たし、区間賞に輝く。中学3年時に参加した「美し国市町対抗駅伝」の選考会をみた近畿大学工業高等専門学校から誘いで、陸上競技を本格的に始めた。



夢は無限大

歌 が好きで、いつの間にか口ずさんでいます。学校からのチラシを見て、両親が「子どものど自慢」に出てみたらと勤めてくれました。人前で歌うのは恥ずかしいけど、優勝したら自分の部屋に欲しかったキャビネットを買ってくれるというので、出場することに。優勝できてびっくりしました。

実 は、自分の歌声はあんまり好きじゃないんです。でも、歌を聞いてくれた人がほめてくれるとうれしいな。夢は歌手じゃなくて、カフェでお菓子を作りたい。他にもたくさんあるけど、まだ決めてません。今は、お母さんの知り合いが集まる会が毎月あって、みんなの前で歌を歌うことにしています。すごく緊張するけど、歌った後はスッキリ。ちょっと楽しくなってきたかも。

名張市民の夢

新春特別企画



夢を持つことは、誰もができること。
夢をもって自分を笑顔に。
夢を目指して人生を豊かに。
夢から始まる元気のリレー。
さあ、2021年のはじまりです。

Profile

市内の小学生が対象の「子どものど自慢」(名張青年会議所主催)に出場。10月にオンラインによる審査があり、約50人の応募者の中から、「音程が取られていて、声がすごくきれい」などと評価されて優勝。今年は、名張をテーマにした曲が名張青年会議所からプレゼントされるそうです。

子どものど自慢で見事優勝
澤 音葉さん



写真右は岩本真歩さん、左は福井菜々友さん。3人は保育所からの同級生



「名張学園祭」実行委員長
杉田香乃さん(写真中央)



Profile

桔梗が丘西在住。奈良県立大学1年生。「名張学園祭」の実行委員長。「名張学園祭」は、若者のパワーとアイデアをまちおこしにつなげようと、名張地区まちづくり協議会が主催した初めてのとなる催し。昨年11月22日にadsホールで開催され、高校生や大学生が、企画・運営を担い、また、ダンスやバンド、吹奏楽など多彩な催しに出演した。



まちの若きチャレンジャー

名張がさびれていくのはすごく寂しい。だから、若い人には、もっと地元目に向けてもらいたい。「まちづくり」って何だろうって考えたとき、それは、「住んでいる人がまちを知ること」だと思うんです。名張に愛着が生まれたときに、「ここに住み続けたい」と思えるようになるんじゃないかな。私自身、名張のいいところを知ると、もっとみんなに知ってもらいたいな、ずっとここにいたいな、と思います。

小さいころから、活動的だったわけじゃありません。名張高校でいろんな体験ができたのが大きかったかな。県議会で伊賀の課題をまとめて発表したり、鳥羽でいろんな高校の生徒と一緒にフィールドワークをしたり。行く前はすごく不安。それが、やってみるとなかなか楽しい。このころからですね。どうしようかと悩んだときは、とにかくやってみる。名張高校の先生に「チャンスは逃すな」。そう言われたのが忘れられません。だから、「名張学園祭」をやってみないかと、名張地区まちづくり協議会の皆さんから声がかかったときも、「何でもやってみよう」という気持ちが後押ししました。「若者主体でやってほしい」。それがはじめに課せられたミッションでした。

友人二人を誘うところからのスタート。高校に実行委員募集のポスターを貼ってもらうなどして、メンバーが増えていき、大学・短大生4人と、高校生7人が集まりました。3月以降隔週で打合せ。前例がなく手探りでしたが、ステージの出演や出店の要請、ポスター作りなどの準備を進めていきました。成り行き上、私が実行委員長になり、準備から楽しむことを目標に。「名張学園祭」の横断幕を作るころには、すごくいい雰囲気になっていました。

終わってみると、1,000人近い来場者。想像以上の結果でした。「高校生の姿がかっこよかった」という小・中学生や、「コロナ禍の中、発表の場があってよかった」という高校生も。それに、実行委員の高校生は、来年も携わりたいと言ってくれるし、「就職活動もあるし、次はちょっとな…」という雰囲気を醸し出していた友人も「今度はもっとよくしよう」って！すごくうれしかった。「名張学園祭」は、学校という垣根を越えて名張の若者がつながれる貴重な場。催しの継続に力を尽くしたい。あと、海外に行ったり、空き家の活用プロジェクトに参加したりと、チャンスがあればいろんなことにチャレンジしたい。これからのことを考えるだけで、わくわくしてきます。

名張市立病院 看護師
中井祐樹さん



Profile

つつじが丘在住。伊賀市出身。名張市立病院で「特定行為」が実施できる看護師第1号となるべく奮闘中。妻と子の3人暮らしで、今年春には家族がもう一人増えるそう。「緊張が強られる現場から離れて、2歳半になる子どもの笑顔を見ると、ほっとします」とにんまり顔。

名張に縁のある一人ひとりが、故郷への熱い思いを胸に、夢をもって懸命に取り組んでいく。

そんな一人ひとりの夢が、いろんな場面でつながっていけば、名張がすごく活気あふれるまちになっていく気がしませんか—



名張市民の





名張へUターンし、工務店を開業
野山直人さん



Profile

瀬古口在住。妻と子3人の5人暮らし。6年前に名張へUターンし、平成29年にリフォームに特化した工務店を開業。名張学園祭に携わった大学生などにも声をかけ、12月に、新町で借りている空き家の活用プロジェクトが始まった。「この空き家が、若者が地域とつながれる場になれば。そんな環境をつくるのも大人の役割」と野山さん。



思えば、近くへ来たもんだ

大阪の建築事務所では、近畿大学の校舎やなんばパークスの図面を手がけました。大きな建物をつくる楽しさもありましたが、ヨーロッパを訪れたのをきっかけに、「日本にも世界に誇れる木造建築がある。もっと勉強したい」という思いに駆られていきました。働きながら、大阪の職業訓練校に通い、刃物のとぎ方から学び直したりもしました。名張を出て9年。子どものころの情景が忘れられず、子育ては名張でと思い帰郷。子どもが生まれ、起業するなら若いうちしかない！と決心し、縁があって、事務所として新町にある木造の空き家をお借りすることになりました。

風が通らないと建物は湿気にやられてしまう。だから、人が住んでいないと、だんだんと朽ちていくのです。空き家の管理に困っている家主と、古民家に魅力を感じて住みたい人が、うまくマッチングされればいいのですが、不動産の売買・貸借は、なかなかシビアな問題。名張でも空き家が増えています。空き家を活用する選択肢を広げられないかと考えています。そこで、お借りした空き家を舞台に何ができるのかを考えて実証していこうと、プロの設計士やデザイナーに声をかけ、打合せの日も決めていました。

いよいよというとき、コロナ禍で計画がストップ。そのうち、「建築の専門家が集まって、何かやっている」というのではなく、「もっと、地域のいろんな人に関わってもらえれば」と思うようになっていきました。願いは、名張のまちなかに人が集い、賑やかであってほしいということ。その原点に立ち返り、古民家で「何かやりたい人」とつながっていくと方向転換したんです。いろんな人に多角的に携わっていただけると、可能性が広がっていくはず。私には、他にも「伊賀産木材のブランド化」という夢がありますが、山の手入れから流通経路まで途方もない課題がある。まずは、山に興味をもってもらうと、人が集えるサウナを作ろうと計画。現在、県内外の若者とつながりながら、少しずつですが、夢に向けて前進しています。

大変で「楽」じゃなくても、やりがいがあるって楽しいと思える道を選ぶことが、私のモットー。これまでの人生は回り道ばかりだったかもしれませんが、その経験を生かして、大好きな名張で活動できていることは、すごくありがたい。名張に帰ってから、自分は「大切な人に囲まれているんだ」と強く思うようになりましたね。



「人を助ける」ことが僕のすべて

母が、医療のドキュメンタリーにはまっています。幼少期のころから、テレビに映し出される「人を助ける」姿を見て、僕も将来は人を助ける人になるんだと思って育ちました。中学校の職場体験では看護師を選択。もう、一直線ですね。看護師になって12年目。看護専門学校に学び、大阪大学医学部付属病院に4年、そして、結婚を機に名張市立病院へ赴任しました。大変な状況にある伊賀地域の救急医療に少しでも貢献したい。それに、地元の人を助けたいという気持ちが大きかったのです。

立ち止まらずに、一步でも成長していきたい。常にそう考えています。2020年4月からは、「クリティカルケア認定看護師教育課程」の研修を受講。クリティカルケアとは、救急医療やICUでの集中ケアのこと。医師の作成した手順書に従って、自己の判断で診療補助(特定行為)が行えるようになるための研修です。例えば、人工呼吸器の設定変更を看護師の判断でタイムリーに行えるので、苦痛の緩和や人工呼吸器からの早期離脱につながります。働きながら、学校に行きながら勉強するのは正直すごくしんどい。でも、勉強したことを、すぐに現場で生かせるので、やりがい半端ないです。

研修の中で、改めて感じているのが多職種連携の重要性。一人の患者さんに、医師や看護師、検査技師、放射線技師、リハビリ技師、栄養士など、様々な職種が関わります。なかでも、私たち看護師は、患者さんにとって最も身近な存在です。医師に伝えにくいことを患者さんから伺ったり、家族の不安に寄り添ったり。医師や技師などの専門的な判断や思いも理解しながら、多職種がチームとして患者さんにとってよりよい選択を提案していくために、私たち看護師は重要な役割があるのです。

特に、救急の現場は、患者さんやその家族の気が動転していることも多いです。「自分だったら」と相手の身になることを心がけるようにしています。自分の子どもだって、いつ運ばれてくるかわからないわけじゃないですか。看護技術を磨くことは当然のこと。その上で、相手の立場に立てるプロを目指したい。一人でできることは限られていますが、病院の多職種チーム、そして伊賀圏域全体が一丸となって、いざという時に「人を助ける」ことができる医療を提供していけるように、私にできることは何だってしていきたいと思っています。



竹雀〜takezumi 代表
辻本和也さん



Profile

滝之原出身で証券会社勤務。長男誕生を機に名張へUターン。2015年に、同郷でデザインが得意な福岡広志さんを誘って工房「竹雀」を設立し、竹を使った創作活動を開始。名張市エコツーリズム推進協議会の「なばり竹あかり SDGs プロジェクト」にも参画。上写真は、プロジェクトによる体験ワークショップのひとつ(右が福岡さん)

Instagramで竹雀の作品がご覧いただけます



 **竹で未来を照らし出す**

都会にあこがれ、大学生の頃大阪へ。就職後も西宮に住んでいましたが、自然豊かな田舎で育児をしようと、2009年に滝之原へ帰郷。ある日、畑で遊んでいた長男が、ミミズをつかんで見せにきました。すると、さっとツバメが飛んできてミミズをパクリ。リアルな食物連鎖を親子で目の当たりにした瞬間でした。また、木の実を食べた小鳥が、種を運んで糞とともに拡散したり、アブラムシの甘い排泄物をアリが食べ、天敵のテントウムシを追い払ったりと、田舎のあちこちで、自然は様々な連鎖の上に成り立っていることを教えてくれます。こうした光景は新鮮で、すごく感心します。

一方で、滝之原では過疎化が進み、「このままでは、地元が減ってしまう」という危機感があります。でも、本来、田舎は様々な可能性を秘めているところ。例えば、京都の料亭で出された料理に美しいもみじが添えられていた。聞けば、10枚1,000円で売られているそう。ネットでクリスマスツリー用に松ぼっくりも売られています。田舎の資源を都会で売ることができれば、雇用が生まれる。重要なのは、その土地にある身近な資源を、有効活用できる仕組みを作っていくことだと思うのです。

滝之原に帰ってきた頃、自宅に薪ストーブを設置。周りは山ばかりなので、薪は簡単に手に入ると思っていたら、そうではなかった。山は杉や檜ばかりで、広葉樹は少なかったのです。ただ、地元の人「竹やったら、いらない」と口をそろえました。かつて、竹で作られていた籠など

の日用品や工芸品が、プラスチックに置き換わり、竹は放置され山を荒らす厄介者となっていたのです。でも、生命力があり成長も早い竹を、資源として使わない手はありません。赤目四十八滝や伊勢神宮外宮などの催しに設置している「竹あかり」をはじめ、竹製のスピーカーやマイボトル、歯ブラシの柄…。厄介者だった竹を様々な商品に生まれ変わる「オール竹(チック)」としてどんどん活用していきたいと考えています。

帰郷してから意識するようになった「グローカリゼーション」という言葉。「地球規模で考え、地域で身近な行動をしよう」という考えです。竹を切って、地主から喜ばれる。竹は「オール竹(チック)」として活用し、最後は炭にして自然にかえす。そして、竹で雇用を生み出し、地域が存続する――。いま、地元のメンバー6人で構成する「竹雀」の仲間や行政などとともに、自然と共生しながら、未来へと続く連鎖をつくっていかうと、一歩ずつ活動を進めているところです。



室生赤目青山国定公園指定 50周年記念 **なばり竹あかり SDGs プロジェクト**

赤目溪谷 幽玄の竹灯

1月31日(日)まで毎日開催 / 午後4時30分～8時

入場料(入山料含む) 大人600円、子ども300円【有料駐車場あり】

「竹雀」の作品をはじめ、体験ワークショップなどで作られた約1000本の竹あかりが、溪谷内を幻想的に照らし出します。1月は、入山口でアンケートにお答えいただくと「かたやき」をプレゼント(先着順)。暖かい格好でお越しください。

☎ NPO法人赤目四十八滝溪谷保勝会エコツアーデスク ☎ 64-2695

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS **なばり竹あかり SDGs プロジェクト**

☎ 観光交流室 ☎ 63-7648

竹をテーマにした、「環境」「社会」「経済」の持続可能な循環を生み出そうとする名張市エコツーリズム推進協議会による取組。地域・学校・企業など多くの皆さんに参画いただきながら、環境保全への意識やふるさとへの愛情を育み、名張の元気と新たな文化の創造を目指しています。

収益還元

環境	社会	経済
竹材の確保 (放置竹林整備)	竹あかりの制作 (ワークショップ・環境学習)	竹あかりイベント (観光誘客)
15 環境保全 ・景観 ・水防	11 交流 ・郷土愛 17 環境意識	8 産業振興 ・雇用 12 使用後は炭に

SDGs…2030年の世界はどうあるべきか。国連加盟 93 カ国が同意した 17 の持続可能な開発目標